

哲学改革への提言

フオイエルバッハ著
植村晋六訳

凡例 底本に於ける旧字体・旧仮名遣いを新漢字・新仮名遣いに改め、送り仮名も現代的にした。

またふりがなを適宜追加し、いくつかを平仮名表記にした。傍点の個所を**太ゴシック体**とした。傍点で原著と異なる個所の訂正を施した。【】及び頁左の脚注は作成者の補足である。

哲学改革への提言

Ludwig Feuerbach

Vorläufige Thesen zur Reform der Philosophie, 1842

神学の秘密は人間学^{アントロポロジー}である。思弁哲学の秘密はしかし、神学——思弁哲学である、それは通俗神学から、このものによつて怖れと無知から彼岸へ遠ざけられた神的本質をそれが彼岸へ置き換えていること、言いかえれば、**現在の**にし、**規定し**、**実現**している、ことによつて区別される。

スピノザは近世の思弁哲学の本来の創始者であり、シェリングはその復興者、ヘーゲルはその完成者である。

「汎神論」は神学の（即ち有神論の）必然的帰結——徹底された神学である。「無神論」は「汎神

論」の必然的帰結、徹底された「汎神論」である。*

* これ等神学上の称呼はここではただ普通の綽名の意味で用いられる。

基督教は多神論と一神論との矛盾である。

汎神論は多神論を述語とせる一神論である、言いかえれば、汎神論は多神論における独立的な諸本質を唯一の独立的な本質の述語、属性とする。かくてスピノザは思惟する物の総体としての思惟と、拡がりある物の総体としての物質とを、実体即ち神の属性とした。神は思惟する物である、神は拡がりある物である。

同一哲学は、それが觀念論の精氣で以て実体なる死せる、鈍性的なる物を生気づけたことよつてのみスピノザ哲学から区別される。ヘーゲルはとりわけ、自己活動、自己差別力、自己意識を実体の属性とした。ヘーゲルの逆説的な命題、「神に就いての意識は神の自己意識である」はスピノザの逆説的な命題、「延長又は物質は実体の一属性である」と同一な基底に基づいていて、自己意識は実体又は神の属性である、或いは神は自我である、という以外の意味を有たない。有神論者が

i 精神と物質あるいは主観と客観を異なる実体と見ない、シェリングの哲学を指すが、それはスピノザと同じ。

現実的意識から区別して神に帰するところの意識は、實在性のない、ひとつの表象にすぎない。スピノザの命題、物質は実体の属性である、はしかし、物質は実体的、神的本質性であるというにすぎず、同様にヘーゲルの命題は、意識は神的本質である、というにすぎない。

思弁哲学一般の改革的な批判の方法は、既に宗教哲学に於いて適用された方法から区別あるものではない。我々はただつねに述語を主語に、そしてかくして主語として客観及び原理にしさえすればいい――それ故に、我々は思弁哲学をほんの顛倒しさえすれば、蔽われざる、純粹、明白の真理を有つのである。

「無神論」は顛倒された「汎神論」である。

汎神論は神学の、神学の立場に於ける否定である。

スピノザによれば（倫理学、第一部、定義三並びに定理一〇【巻末参照】）、実体の属性或いは述語は実体自身である如く、ヘーゲルによつてもまた、絶対者の、主語一般の述語は主語自身である。絶対者はヘーゲルによれば存在、本質、概念（精神、自己意識）である。ただ存在として思惟され

たる絶対者はしかるに、全然存在以外の他の何ものでもない。絶対者は、この、或いはかの限定性、範疇の下に思惟される限り、この範疇、この限定性へ全く没入し、かくしてこのものを度外視すれば、それはひとつの単なる名に帰するのである。然しそれにも拘わらず、尚も絶対者は主語として根柢に存し、**真の主語**は、それによつて絶対者が単なる名ではなく、却つて**或物**であるところの**そのものを有し、限定は、**だがなお依然として単なる述語の意義を有つにとどまる、あたかもスピノザに於いて属性が然かる如く。

思弁哲学の絶対者或いは無限者、は、心理学的に観れば、限定されていないもの、規定を外れたもの——一切の規定されたものからの抽象でありつつ、この抽象から区別された、しかし同時に、再びこれと同一とされた本質として定立されたものに外ならない。歴史的に観ればしかし、古い神学的Ⅱ形而上学的な、有限でなく、人間的でなく、物体的でなく、規定されてい**ず**、性質を有たぬ本質、即ち本質ならぬもの——**活動として定立された先世界的無に外ならない。**

ヘーゲルの論理学は、**理性と現在に齎された、論理学となされた神学である。神学の神的本質が総ての実在の、即ち総ての規定、総て有限性の観念的な、或いは抽象的な総体である如く、論理学もまたそうである。**地上に見出される総てのものは、また神学の天上に於いても見出される——そ

のように、自然に於いて見出される総てのものは亦、**神的論理学の天上に於いて見出される**、質、量、度、本質、化学的機構、機械的機構、有機的機構。一切を我々は神学に於いて**二度有つ**、一度は抽象的に、今一度は具体的に。一切をヘーゲル哲学に於いて**二度有つ**、論理型の対象として、しかして次に今一度自然Ⅱ並びに精神哲学の対象として。

神学における本質は、**超越的な**、人間の外へ定立された、人間の**本質**である。ヘーゲル論理学における本質は**超越的な**思惟、**人間の外へ定立された**、人間の思惟である。

神学が人間を**ひき割り**、**外化**し、然る後にこの外化された本質を再び人間と同一化する如く、ヘーゲルは自然並びに人間の**単一な**、**自己同一的な本質を多様化**し、**寸断**し、然る後にこの無理に分離されたものを再び無理に媒介する。

形而上学、或いは論理学は、所謂**主観的精神から分離されない**時にのみ、ひとつの**実存的な**、**内在的な**学問である。形而上学は**密教的心理学**である。質が感覚なくして尚或物でもあるかのように、感覚が質なくして尚或物でもあるかのように、質をそのもののみで、感覚をそのもののみで観察しようとし、両者をひき割いて特殊の科学とするとは、何という恣意、何という暴行であろう。

ヘーゲルの**絶対精神**とは**抽象的な**、自己自身から分離された、所謂**有限精神**に外ならない。あたかも、神学の謂う無限なる本質が**抽象的な**、有限な本質以外の何ものでもない如く。

絶対精神は、ヘーゲルによれば、芸術に於いて、宗教に於いて、哲学に於いて自己を顕現し、或いは実現する。すなわち独逸風に言えば、**芸術の、宗教の、哲学の精神は絶対精神**である。然し、芸術と宗教を、ひとは人間的な感覚、想像及び直観から、哲学を思惟から、簡単にいえば絶対精神を主観的精神或いは、人間の本質から、分離し得ない。我々を再び古い、神学の立場に逆転せしめ、我々をして絶対精神をひとつの**他の、**人間の本質とは別異な精神として、即ちひとつの、我々の外に存在する、我々自身の亡霊として描き出さしめるのでないならば。

「絶対精神」は神学の「死別せる精神」である。だが、彼はヘーゲルの哲学に於いて未だ**亡霊**としてさまようている。

神学とは**亡霊の信仰**である。ところで、**通俗神学**は其の亡霊を感性的な想像に於いて有し、**思弁神学**はこれを非感性的な抽象に於いて有つてゐる。

抽象するとは自然の本質を自然の外へ、人間の本質を人間の外へ、思惟の本質を思惟作用の外へ定立することである。ヘーゲル哲学は、その全体系をこれらの抽象作用に基づけることによって、人間を自己自身から疎外した。それは成程、自己の分離するものを再び同一化する。だが、ひとつの、それ自身再び、分離し得る、間接的な仕方でのみ然かなすのである。ヘーゲル哲学には**直接な統一、直接的な確実性、直接的な真理**が欠けている。

抽象によつて人間から引き離された・人間の本質の、人間との、直接的な、明白な、ごまかしのない同一化は積極的な仕方に於いてではなく、唯ヘーゲル哲学の否定としてのみそれから導き出され得、一般に、それが思弁哲学の**總体的な否定**——仮令それはこのものの**真理**であるにしても——として把握される時にのみ、**把握され、理解され得る**のである。一切は成程、ヘーゲル哲学のうちに伏在している、だが、つねに同時にその**否定、その対立者**と共にである。

絶対精神が、所謂、有限な、主観的な精神であり、それ故に、それはこのものから分離され得ず、また、されてはならない、ということの**実証**は——**芸術**である。芸術は、此岸の生が真の生であり、**有限なるものが無限なるものである**。という感情から、**最高者、神的本質**としての、ひとつの**限定**

された、現実的な本質に対する感激から生まれるものである。基督教的一神教は芸術的、学問的教養の如何なる原理でも内包しない。ただ多神教、所謂偶像崇拜、のみが芸術と学問の源泉である。ギリシヤ人は唯、彼等にとつて人間の形態が無条件に、疑念なく最高の形態、神性の姿と思われたことによつて造形美術の完成にまで自らを高めた。基督教徒は、彼等が基督教神学を實踐的に否定し、神的本質として、女性の本質を崇拜した時はじめて詩作にまで達した。基督教徒は、彼等の表象に上つていた如き、それが彼等の意識の対象であつた如き、彼等の宗教の本質との矛盾に於いて芸術家であり、詩人であつた。ペトルルカは宗教のからして、彼が彼のラウラを神化した詩を悔いたのである。何故に、基督教徒は、異教徒の如く彼等の宗教的表象にびつたりと適つた芸術品を有たないのか。何故に、一つとして彼等を十分に満足させる基督の像を有たないのか。基督教徒の宗教的な芸術が彼等の意識と真理との間の破壊的な矛盾に躓くが故である。基督教の本質は、真実には人間の本質でありながら、基督教徒の意識ではしかし、ひとつの他の、人間的ならぬ本質である。基督は人間であるべきであり、しかして復た人間であるべきではない。彼はひとつの二義性【Amphibolie】である。然るに芸術はただ、真なるもの、二義的ならぬものをのみ描写し得る。

人間的なるものこそ、神的なるものであり、有限なるものこそ、無限なるものである、という確乎とした、血と肉となつた意識は、やがて、力、深さ、熱に於いて従來の総てを凌駕するであろう

新らしい詩と芸術の源泉である。彼岸の信仰は、絶対に詩作的ならぬ信仰である。苦痛は詩の源泉である。ひとつの有限なる本質の亡失をひとつの無限なる損失として情感する者のみが抒情詩的火となる力を有する。もはやあらざるものに対する追憶の痛々しい刺衝のみが人間の裡に於ける最初の芸術家、最初の觀念論者である。然るに彼岸の信仰はどんな苦痛をも仮象となし、真実ならぬものとして了^{しま}う。

有限なるものを無限なるものから、規定されたるものを規定されぬものから導き出すところの哲学は有限なるものと規定されたるものの眞の措定には到底達しない。有限なるものが無限なるものから導き出される——とは、無限なるものの、規定されぬものが規定され、否定されるということである、規定を有しない、即ち有限性を有たない無限なるものは無限なるものの實在性に、それ故に定立されたる有限なるものに外ならないことは承認されている。然し、絶対的なものの消極的な、本質ならぬものが尚根柢に存し、従つて、定立された有限性は再び依然、廃棄される。有限なるものは無限なるものの否定であり、しかしてまた無限なるものは有限なるものの否定である。絶対者の哲学は一個の矛盾である。

神学に於いて人間が神の眞理、實在性である如く——蓋し、神を神として実現し、神を一の現実

的な本質となすところの総ての述語、例えば、力、智慧、諸善、愛、有限なるものからの相異を条件としているものとしての、無限性と人格性とすら、は人間に於いて且つ人間と共に始めて定立されるのであるから——あたかもその様に、思弁哲学に於いて**無限なるものの真理は有限なるもの**である。

有限なるものの真理は絶対哲学によつて**間接な、顛倒された仕方**でのみ言い表されている。もし無限なるものが、それが**規定される時**、言いかえれば、それが無限なるものとしてではなく、却つて**有限なるもの**として定立される時、その時にのみ存在し、その時にのみ**真理と現実性**とを有するとすれば、誠に眞実には**有限なるものこそ無限なるものである**。

眞の哲学の課題は無限なるものを有限なるものとしてではなく、却つて有限なるものを有限ならぬものとして、無限なるものとして認識することである。或いは、有限なるものを無限なるものうちへではなく、却つて無限なるものを有限なるものうちへ定立することである。

哲学の端初は神ではなく、絶対者ではなく、絶対者或いはイデーの**述語**としての存在ではない。——哲学の端初は有限なるもの*、規定されたるもの、**現実的なものである**。無限なるものは有限

なるものなくしては到底思惟され得ない。ひとつの**規定された性質**を思惟することなくして、汝は**性質なるもの** (die Qualitat) を思惟し、定義し得るであろうか。それ故に、規定されぬものではなく、却つて規定されたるものこそ最初のものである。蓋し、**規定された性質は現実の性質に外ならず**、思惟された性質に現実的な性質が先行するからである。

* 有限なる語を私はつねに「絶対」哲学に謂う意味に於いてのみ用いる。絶対哲学には、絶対者の立場からして實在的なるもの、現実的なるものは現実的ならぬもの、空無なるものとして現れる、蓋し、絶対哲学にとつては現実的ならぬもの、規定されぬものこそ實在的なるものと考えられるからである、仮令他方に於いて再び**空無の立場**から、有限なるもの、空無なるものが實在的なるものとして現れるにしても——それは、特に初期のシェリングの哲学に於いて現れて居り、しかし、ヘーゲル哲学の根柢にも尚存しているところの一個の矛盾である。

哲学の**主観的な起源**と道程は、亦その**客観的な道程**と起源である。汝は、性質を思惟するに先だつて、性質を**感ずる**。思惟に**受動** [Liden] が先行する。

無限なるものは有限なるものの**真の本質**——**真の有限なるものである**。真の思弁、或いは哲学は**真の、且つ普遍的な経験**以外の何ものでもない。

宗教及び哲学に謂う無限なるものは何等かの**有限なるもの**、何等かの規定されたるものとは何か異なつたものではなく又決してなかつた。但しそれは**神秘化**されており、又されていた、言いかえれば、それは、**何等有限なるものでなく、何等限定されたものでない**、という**要請を有するところ**のひとつの有限なるもの、ひとつの規定されたるものである。思弁哲学は神学の犯したと**同一な過失**を犯したのであつた——現実性或いは有限性の諸規定をして**当にそのもの**としているところの限定性の単に**否定**によつてこれ等を無限なるものの規定、述語としたのであつた。

正直と率直は万事に有益である——哲学にとつても亦。哲学はだが、その思弁的無限性の有限性を告白する時——それ故に、次のこと、即ち例えば、神に於ける自然の秘密は人間的本性の秘密に外ならず、そのうちから意識の光を産み出さんがために、哲学が神のうちに定立せる**夜**は、哲学が固有な、**暗い本能めいた物質の实在性と不可欠性**とに就いての感情に外ならない、ことを告白する時にのみ、正直で率直なのである。

抽象的なるものより具体的なるものへ、観念的なるものより實在的なるものへ、の、思弁哲学從來の行程は逆である。この道ではひとは**到底真の、客観的な實在性**にまでは達することなく、却つてつねに、**この道に固有な諸々の抽象の実現**にのみゆきつくにすぎない。しかしてあたかもこの故

に、精神の眞の自由に達することはないのである。蓋し、ただ事物や本質を客觀的現實性のままに直觀する事のみが人間を自由ならしめ、且つ一切の偏見から免れしめるからである。觀念的なものより、實在的なものへの移行はひとり実践哲学においてのみその場所を有する。

哲学は、あるところのものの認識である。事物と本質とをそれ等のあるがままに思惟し、認識すること——このことが哲学の最高の法則、最高の課題である。

あるところのものの、そのあるがままに——それ故に、眞実なるものの、眞実に言い表されるのは浅薄に見える。あるところのものの、そのあらざるままに——それ故に、眞実なるものの、眞実ならず、顛倒されて言い表されるものは深遠であるかに見える。

誠実さ、單純さ、明確さは実存的な哲学の表だつた表徴である。

哲学が発端とするところの存在は意識から、意識は存在から分離され得ない。感覺の實在性が性質であり、逆に感覺が性質の實在性である如く、存在も亦、意識の實在性であり、しかし同様に、逆に意識は存在の實在性である——意識が、はじめて現實的な存在である。精神と自然との実存的

【reelle】な統一はただ意識であるのみである。

総ての規定、形式、範疇は、乃至、他に如何様と呼ばれるにせよ、思弁哲学が絶対者からもぎとって、**有限的なるもの経験的なもの**、の領域へ放逐し去ったところの・それらは、まさしく有限的なるものの**真の本質を、真の無限なるもの**を哲学の**真の、且つ最終の秘義**を包含している。

空間と時間は凡ゆる本質の生存形式【Existenzformen】である。空間と時間に於ける生存のみが生存である。空間と時間の否定は、つねに生存の**制限の否定**にすぎず、**生存の本質の否定ではない**。時間のない感覚、時間のない意志、時間のない思想、時間のない本質は怪物である。時間一般を丸で有たないものは、意欲への、思惟への何等の時間、何等の衝迫をも有しない。

形而上学に於ける、事物の本質に於ける、空間と時間の否定は最も有害なる実践的帰結を有する。**至る処で時間と空間の立場に立つ者のみが、生活に於いても亦、手練と実務的な才智を有する。**空間と時間は実践の第一の基準である。その形而上学から時間を除外し、永遠な、言いかえれば、**抽象的な、時間から分離された生存を神化する・民族は当然の帰結としてその政治学からも亦、時間を除外し、反立法法的、反理性的、反歴史的なる保守的原理を神化する。**

思弁哲学は、時間から分離された発展を絶対者の一つの形式、一つの属性としたのであった。発展の、時間からのこの分離はしかし、思弁的気随の正真の傑作であり、かねてまた、思弁哲学者達は、彼等の絶対者について、神学者達が、人間のあらゆる情緒を情緒なくして有し、愛なくして愛し、怒りなくして激怒する彼等の神について、行つたとあたかも同様に振舞つた、ということの適切な説明である。時間のない発展とは、発展のない発展というと同断である。絶対的本質は自発自展する、という命題は——のみならず、ただ逆にしてのみ、真の、理屈に合つた命題である。それ故に、次の如く云われねばならない——唯、自身を發展せしめ、自身を時間的に展開する本質のみが、絶対的な、即ち真の、現実的な本質である。

空間と時間は、現実的な無限的なものの顕現形式である。

何等の限界、何等の時間、何等の窮迫もないところ、そこには亦、何等の性質、何等のエネルギー、何等の精気、何等の熱、何等の愛も存しない。唯、窮迫にあるノイトワイデンデ【*notwendig*】本質である。欲求のない生存は余計な生存である。欲求一般から自由なものは、亦何等生存の欲求をも有たない。それがあるか、ないかは同一である——そのもの自身にとつて同一で

あり、他のものにとつて同一である。窮迫のない本質は根拠のない本質である。唯、悩み得るもののみが生存に値する。唯、苦痛に充ちた【*leiden*】本質のみが神的なる本質である。受悩【*Leiden*】のない本質は本質のない本質である。受悩のない本質はしかし、感性のない、物質のない本質にならない。

受動的な原理【*passives Prinzip*】を自らのうちに含まぬところの哲学、**時間のない生存**について、**持続のない存在**【*Dauersein*】について、**感覚のない性質**について、**本質のない本質**について、**生のない、肉と血のない生**について思弁するところの哲学——ひとつのかような哲学、例えば絶対者一般の哲学の如き、は徹頭徹尾**一面的な哲学**として、**必然的に経験**をその対立物に有っている。スピノザは物質を成程実体の一属性としたのであった、だが、**受動の原理**【*ein Prinzip des Leidens*】としてではなく、却つて正に、それが**受動しない**その故に、それが**唯一で、不可分的で、無限である**が故に、それは、そのかぎり、それに**対立的な、思惟の属性と同一**の規定を有するが故に、簡単にいえば、**あたかも、ヘーゲルの論理学における本質が自然と人間の本質ではあるが、本質なき、自然なき、人間なき**それであると同様に、それがひとつの**抽象的物質、ひとつの物質なき物質**、であるが故に、この故に然かなしたのであった。

哲学者は、人間に於ける哲学しないところのもの、寧ろ、哲学に反対し、抽象的な思惟に敵対するところのものを、それ故にヘーゲルに於いてただ附注に貶されているものを、哲学の本文へ採り上げねばならない。かくしてのみ哲学はひとつの普遍的な、対立なき、反駁し得ず、對抗を許さぬ力となるのである。哲学は従つて、自己から始めるべきではなく、却つてその反対から、哲学ならぬものから始むべきである。我々の衷なるこの、思惟とは別異な、哲学ならぬ、絶対に反スコラ的な本質が感覺論の原理である。

哲学の本質的な道具、器官は、能働性〔*Activität*〕、自由、形而上学的無限性、觀念論の源泉なる、頭脳と、受働〔*der Leiden*〕、有限性、欲求、感覺論の源泉なる、心臓とである——理論的に表現すれば、思惟と直観である。何故なら、思惟は頭脳の欲求であり、直観、感官は心臓の欲求であるから。思惟は学派、体系の原理であり、直観は生の原理である。直観に於いては私は対象によつて規定され、思惟に於いて私は対象を規定する、思惟に於いては私は自我であり、直観に於いて私は非我である。唯、思惟の否定から、対象によつて規定されてあることから、受働〔*Passivität*〕から、總ての快樂と窮迫の源泉からのみ、真の、客観的な思想、真の、客観的な哲学が産み出される。直観は生存と直接に同一な本質を、思惟は生存からの区別、分離によつて媒介された本質を与える。それ故に、ただ、本質に生存が、思惟に直観が、能働性に受働性〔*Passivität*〕が、ドイツの形而上学のスコ

ラの的な粘液にフランスの感覺論と唯物論の反スコラの、多血的な原理が合一される場合にのみ、その場合にのみ、生と真理は存するのである。

哲学のあり方は、即ち哲学者のあり方である、しかして逆に、哲学者の諸性質、哲学の主観的な条件と要素とは、また、その客観的な条件と要素である。真の哲学者、生、人間に同一な哲学者はガリヤールゲルマンの血をひくものでなければならぬ。この混血を何も驚愕するに当たらない。諸君、純潔なドイツ人よ！ 既に一七一六年に、この考えを *Acta Philosophorum* は宣明していた、「もし、我々がドイツ人とフランス人とを較べ合わせるならば、成る程、後者のその資質はより多くの敏活さを有ち、しかし前者のそれはより多くの堅実さを有っている。で、こう云うのは当を得たことでもある。ガリヤールゲルマニア気質は最もよく哲学に適している、或いは、フランス人を父とし、ドイツ女を母とせる子供は (*casteris Paribus*)ⁱⁱ ひとつ良好なる哲学資質を獲るに違いない。」全く、そうだ。但々我々は母をフランス女とし、父をドイツ人としなければならぬ。心臓——女性的な原理、有限なるものに対する感覚、唯物論の座——はフランス風な感じ方をなし、頭脳——男性的な原理、観念論の座——はドイツ風な感じ方をする。心臓は革命し、頭脳は改革する、頭脳

i Christoph August Heumann が編輯した哲学雑誌、いくつか公開されている。
ii *ceteris paribus* ラテン語：「他の条件が同じならば」

は事物を停止し、心臓は運動しめる。だが、唯、運動、激擾は、熱情、血、感性のあるところのみ、精神も亦存在する。最初にドイツ人達を彼等の哲学的な銜学癖とスコラ趣味からもぎ抜いたものは、全くライプニッツのエスプリ、彼の血の気の多い、唯物論的唯心論的な原理であつた。

心臓は従来、哲学に於いて神学の胸壁とされていた。然し、あたかも心臓こそは人間に於ける全然反神学的な、神学の考え方に於いて不信心な、無神論的な原理である。蓋し、心臓は自分自身の外には何も信ぜず、唯、彼の本質の、反駁を許さぬ、神的、絶対的な实在性をのみ信ずるからである。然し、心臓を理解しない頭脳は、主観と客観への分離、区別がその仕事であるがために、心臓の固有な本質をひとつの、心臓から区別された、客観的、外的、な本質に転化する。確かに心臓には、ひとつの他の本質が欲求である、とはいえ、それは唯、彼に等しいものであり、心臓から区別されない、心臓に矛盾しない、かかる本質のみである。神学は心臓の真理を、宗教的情緒の真理を否定する。宗教的情緒、心臓は、例えば、「神は悩む」という。神学は反之、これに悩んで云う、「神は悩んでいない」と、即ち、心臓は神の人間からの区別を拒否し、神学はこれを主張するのである。

有神論は頭脳と心臓との分裂に基づいており、汎神論はこの分離の、分裂に於いての止揚である——蓋し、それは神的本質を唯、超越的なものとしてのみ内在的ならしめているからである——

ところで、人間Ⅱ神論【Anthropotheismus】はこの分裂の、分裂なき止揚である。人間Ⅱ神論は悟性にまで齎された心臓である。それは、心臓が彼の仕方に於いて語ることを頭脳に於いて、ただ個性的仕方に於いてのみ言い表す。宗教とは情緒、感情、心臓、愛、言いかえれば、神の、人間に於ける否定、解消でしかない。新しい哲学は従つて、宗教的情緒の真理を否定する神学の否定として、宗教の肯定である、人間Ⅱ神論は自覚された宗教——自分自身を理解せる宗教である。神学は反之、宗教を、これに定立するかの様な見せかけの下に、否定する。

シェリングとヘーゲルとは反対である。ヘーゲルは自主、自己活動、の男性的な原理を、簡単にいえば、観念論的原理を代表し、シェリングは受容性、感受性、の女性的原理を代表する、——初めに彼はフィヒテを、次にプラトンとスピノザを、最後にＪ・ベエーメを受け入れた、——簡単にいえば、唯物論的原理を代表する。ヘーゲルは直観に於いて欠け、シェリングは思惟力、限定力に欠けている。シェリングはただ一般的な事柄に於いてのみ思想家である、併し、問題の中核である、特殊な事柄、限定された事柄に於いて、彼は空想の夢遊病に陥る。シェリングに於ける合理主義はただ見せかけでしかなく、非合理主義こそ真相である。ヘーゲルは、ひとつの抽象的な、非合理的原理にⅡシェリングはひとつの、合理的原理にⅡ矛盾せる、神秘的、空想的、な、生存と実在にの

i 「人間Ⅱ神論」Anthropotheismus 人間の神格化、人間の論理的発展過程を神の自己発展とするヘーゲル体系を指す。

み到達する。ヘーゲルは膚ざわりの荒い、シェリングは華奢な、言葉によつて實在論の欠除を補う。ヘーゲルは常でないことを尋常に表現し、シェリングは尋常のことを常でなげに表現する。ヘーゲルは事物を単なる思想となし、シェリングは単なる思想——例えば、神の自主性——を事物となす。ヘーゲルは思惟する頭脳達を欺き、シェリングは思惟しない頭脳達を欺く。ヘーゲルは没理性を理性とし、シェリングは逆に、理性を没理性とする。シェリングは夢の中なる實在哲学であり、ヘーゲルは、既に概念の中なるそれである。シェリングは抽象的な思惟を想像に於いて否定し、ヘーゲルはこれを抽象的な思惟に於いて否定する。ヘーゲルは否定的思惟の自己否定として、古い哲学の完成として、新しい哲学の消極的な端初である。シェリングに新しい實在哲学であるという想像、幻想を有する古い哲学である。

ヘーゲル哲学は、特にカントがこれを宣明せる如き、思惟と存在の矛盾、の止揚である。だが、注意せよ！ただ、矛盾の内部での一要素の内部での——思惟内部での、この矛盾の止揚にすぎない。思想はヘーゲルに於いて存在である。——思想は主語、存在は述語である。論理学は思惟の要素に於ける思惟、或いは自己自身を思惟する思想——述語のない主語、或いは自己について同時に主語であり、同時に述語であるところの思想である。だが、思惟の要素に於ける思惟は尚抽象的な思惟である。従つて、それは自己を實現し、外化する。この實現され、外化された思想が即ち自

然であり、一般的には実在的なもの、存在である。だが、この実在的なものに於ける真の実在的なものは何であるのか。思想である——それはこの故に亦やがて実在性の述語を再び自身から剥奪し、自己の真の本質としてのその無述語性を恢復するところのものである。然し^{あか}恰もその故に、ヘーゲルは**存在としての存在**、自由な、自主的な、自己自身に於いて幸福な存在には到達しなかった。ヘーゲルは自己自身を思惟する思想の述語として、客観をただ思惟したにすぎなかった。現今認められている、ヘーゲルの宗教哲学に於ける、**存在せる宗教と思惟された宗教**との間の矛盾は唯、ここでも亦、他の所に於けると同様に、思想が主語とされ、対象、宗教はしかし、思想の単なる述語とされている、ということにのみ由来しているのである。

ヘーゲル哲学を廃棄しない者は、神学を放棄しない。自然、実在は**イデー**によって定立される、というヘーゲルの教説は——自然が神によって、物質的本質がひとつの非物質的な、即ち、抽象的な本質によって創造された、という神学の教説の合理的表現にすぎない。論理学の終りに於いて絶対的イデーはひとつの朦朧とした「**決意**」にすら到達しており、かくして神学の天国から出た自身の素性をわれとわが手で記録しているのである。

ヘーゲル哲学は神学の最後の逃げ場、最後の合理的な支柱である。嘗てカトリックの神学者達が

プロテスタンティズムと戦い得んが為に、事実上、アリストテレス派となった如く、今やプロテスタントの神学者達は「無神論」戦い得んがために、当然、ヘーゲル派とならねばならない。

思惟の存在に対する真実の関係はただ、こうである、**存在は主語**であり、**思惟は述語**である。思惟は存在から出てくるが、存在は思惟からは出ない。存在は自分から且つ自分によつてあり、——存在は唯、存在によつてのみ与えられ、——存在はその根拠を自分の衷^{うち}に有つてゐる、何故なら、存在のみが意味、理性、必然性、真理、簡単にいえば、一切に於ける一切であるから。——存在はある [Sein]、非存在は非存在、即ち無、無意味であるが故に。

存在としての存在の本質こそ自然の本質である。時間的な発生はただ、形態の上にのみ及ぶのであつて、自然の本質の上には及ばない。

思惟と存在の**真実の統一**が**断ち切られて**いる場合、ひとが最初に抽象によつて存在からその**魂**、その**本質**を取り去り、然る後、あとから再び、存在から抽象された本質の中に、このそのもののみでは空虚^{うつろ}な存在の、**意味と理由**とを見出す場合、にのみ存在は思惟から導き出されるのである。あたかも、ひとが世界の本質を世界から氣隨に分離する場合にのみ、世界が神から導き出され、又

出されねばならない如く。

所謂、実証的哲学者達の如く、哲学の特殊な实在原理に従つて思弁する人間は、

悪魔にぐるぐるひきまわされた、

瘦せた荒地のけものようだ。

それで美しい、緑の草原はまんぐるり

を取りまいているのだ。

この美しい、緑の草原こそ、自然と人間である。蓋し、両者は相属しているものであるから。自然を觀よ！ 人間を觀よ！ ここにこそ、汝等は哲学の諸々の秘義を眼のあたり見るのである。

自然は存在エクスistenzから區別区別されていない本質であり、人間は自身を存在から區別する本質である。區別しない本質は區別する本質の基底である——自然は乃ち人間すなわの基底である。

新しい、唯一つ実証的な哲学は、凡ゆる学校哲学の否定であり、仮令それがこのものの真理を自身のうちに含むにせよ、又ひとつの抽象的な、特殊な、即ちスコラ的な性質としての哲学の、否定である。即ち新しい哲学は暗記や、特殊な言葉や、特殊な名称や、特殊な原理を丸で有たない。そ

れは**思惟する人間**そのものである——自然の自覚せる本質として、歴史の本質として、国家の本質として、宗教の本質として**存在し**、且つかく**自らを識**るところの人間——一切の反対と矛盾の、一切の、能動的並びに受動的、精神的並びに感性的、政治的並びに社会的な、性質の、**現実的な**（空想的ならぬ）**絶対的な同一性として存在し**、且つかく**自らを識**るところの人間——は、次のことを知っている、即ち、思弁哲学者達、或いは寧ろ神学者達が人間から分離し、ひとつの抽象的な本質として対象化せる、**汎神論の本質が**、**人間自身の非規定的な**、しかし無限に規定され得べき本質に外ならないということ。

新しい哲学は、**神秘主義と同様に合理主義の、人格神論と同様に汎神論の、有神論と同様に無神論の、否定である**。それはひとつの**絶対**に**独立的な、純粹な真理としてこれ等一切の反定立的真理の統一**である。

新しい哲学は、既に宗教哲学として**積極的にも消極的にも**宣明されていた。その分析の諸帰結を前提としさえすれば、そのうちにひとつの実証的な哲学の諸原理は認識されるのである。だが、新しい哲学は民衆の愛顧のために媚びるものではない。自分自身を確信するが故に、それは自己のあるところのものが**外観に現れる**ことを軽んじる。然し、あたか恰もその故に、最も本質的な関心事に於い

て外観が本質とされ、幻影が実在とされ、名が実とされる現代に対してはそれがないところのものであらねばならないのである。かくてこそ反対が互いに補う合うのである！ 無が或物と、偽りが真理とされるところでは、当然の帰結として或物は無とされ、真理は偽りとされねばならない。しかしてひとが——滑稽にも哲学が決定的に、普遍的に自己の迷妄を醒まそうとするような瞬間に於いて——哲学を全然、新聞大衆の臆見と意見に基づけようという、従来未聞の試をやる場合には、ひとは亦、公明な、基督教徒らしい仕方でもつて、哲学的著作をほんの、それがアウグスブルガー・アルゲマイネ・ツァイトウング紙上で大衆の悪評が高いという丈のことでもつて反駁しなければならぬ。おお！ 全くのこと、ドイツの一般状態は何という廉潔な、何という道徳的なことなんだ。

ひとつの新しい原理はつねにひとつの新しい名称をもつて顕れてくる、言いかえれば、それはひとつの名称を卑い、爪弾きされている身分から王侯の地位に引き上げ——これを最高なるものの称呼とする。ひとは、新しい哲学の名、「人間」の名を「自覚」と訳する場合には、新しい哲学を古い哲学の考えで解釈しているのであり、新しい哲学を再び古い立場に逐いかえすのである。蓋し、人間から分離されたものとしての、古い哲学に謂う自覚は實在性のない一個の抽象であるからである。人間は自覚である。

i アウグスブルグで発行されていた日刊紙。

言語の上では「人間」なる名称は確かに一つの特異な名称であるが、真理の上では総て名称の名称である。人間にこそ述語 *ἰδιόνομος* (多名的 *[polyónomos]*) が属する。人間は、何を名づけ、何を言い表すにしろ、いつも自分固有の本質を言い表しているのである。言葉は従つて、人間の文化程度のどの位高く、又はどの位低いかの基準である。神の名は人間にとつて最高の力、最高の本質、言いかえれば、最高の感情、最高の思想とされているものの名称にすぎない。

「人間」なる名は通常唯、欲望や、感覚や、性向をもつた人間——その精神から、一般にその一般的な、公けの性質とは區別して——例えば、芸術家、思想家、著作家、裁判官、とは區別して、人格 (*Person*) としての人間を意味している。彼が思想家であり、芸術家であり、裁判官であり、等であることが恰も、**人間のひとつの性格的、本質的な特質**ではないかの如くに、人間は芸術に於いて、学問、等に於いて**自己の外にある**のであるかの如くに。思弁哲学は人間の**本質的な諸性質**の人間からのこのような分離を理論的に固定し、かくして全然抽象的な諸性質を独立な本質として神化し去つたのである。例えば、ヘーゲルの自然法 (*Naturrecht*) 百九〇節にはこう述べられている、「法律に於いて、対象は**人格** (*Person*) であり、道德的見地に於いては**主観** [*Subjekt*] であり、家族に於いては家族員であり、市民社会に於いては市民 (*Bürger*) としての」である。今の場合、欲

求の見地に於いて、それは、人間とひとがよんでいる**表象（？）**ⁱの具体物である。その故に、ここに於いて、はじめて且つまた本来はただここに於いてのみ、この意味に於ける人間が問題となるのである。」この意味に於ける、である、それ故に、市民、主観、家族員、人格が問題である場合にも、真実にはいつも**同一な本質**、人間のみが、夫々別個の意味に於いてのみ、夫々別個の性質に於いてのみ問題とされるのである。

人間を欠いた、人間の外部の、それどころか人間を超越さえしているところの、法律、意志、自由、人格に関する総ての思弁は**統一のない、必然性のない、実体のない、根拠のない、實在性のない**思弁である。人間は自由の存在、人格の存在、法の存在である。人間のみがフィヒテの自我の**根拠、地盤**であり、ライプニッツのモナドの**根拠、地盤**であり、絶対者の**根拠、地盤**である。

総ての学問は**自然**の上に基づけられねばならない。ひとつの学説は、その**自然的な基底**が見出されていぬかぎり、ひとつの**仮設**であるにすぎない。このことは特に**自由の説**について妥当する。ただ新しい哲学のみが、従来ひとつの**反自然主義的な、超自然主義的な憶説**であつたところの**自由を自然化**し得るのである。

i この「？」はヘーゲルの原文ではなく、フオイエルバッハが付けたモノのようだ。

哲学は再び自然科学に結びつかねばならず、自然科学は哲学に結びつかねばならない。この、相互の要求の上に、内面的な必然性の上に基づいた、結合は、哲学と神学との間の従来の不釣り合いな結婚よりも、より長く続くであらうし、より幸福であらうし、収穫も多いであらう。

人間は国家の“Ev koi páv (一にして且つ一切なるもの [hen kai pan]) (ヨードル版、基本性質)”である。国家は人間の本質の実現され、完成され、顕にされた、総体である。国家に於いて、人間の本質的な諸性質もしくは諸活動は特殊な身分に於いて現実化される、だが、国家の元首の人格 (Person) に於て再び同一性に還元される。国家の元首は、差別なく凡ゆる身分あちを代表しなければならない。彼の前には凡ゆる身分が等しく必然であり、等しく権利づけられている。国家の元首は普遍的人間 (der universale Mensch) の代表者である。

基督教は人間の名と結合して、神・人 (Gott-Mensch) なる一つ名とした、——人間の名をそれ故に、最高なる本質の一つの属性にまで高めたのであった。新らしい哲学は、真理のままにこの属性を实体に、述語を主語にしたのである——新らしい哲学は**実現されたイデー**——**基督教の真理**である。然し、あたかも基督教の**本質**を衷うちに含むが故に、それは基督教の名を廃棄する。基督教は真理をた

だ真理との矛盾に於いてのみ言い表していた。矛盾のない、純粹な、ごまかしのない真理はひとつの新しい真理——ひとつの新しい、自律的な、人類の行為である。

——了——

スピノザ『エティカ』より

定義二

By 'substance' I mean that which is in itself, and is conceived through itself: in other words, that of which a conception can be formed independently of any other conception.

「実体」とは、それがそれ自体にあり、それ自体で構想されていることを意味します。つまり、他の概念とは無関係に概念を形成できるものです。

定理十

X. Each particular attribute of the one substance must be conceived through itself.

一つの実体の特定の各属性は、それ自体で構想する必要があります。

底本：『将来の哲学の根本命題』岩波文庫・昭和五（1930）年一月第一刷 1949.10.25 第十二刷

作成者：石井彰文

作成日：2019.12.1